

久しぶりの
おねしょ

Paraphilia -倒錯の樂園-

目次

第一章：嫌な感覚の目覚め

第一章：嫌な感覚の目覚め

「……あ。」

ある朝、沙也加は嫌な感覚と共に目を覚ました。

やってしまった。おねしょをしてしまった。昨日寝る前にトイレに行かなかったのが原因だろう。

「パパにバレる前になんとかしなきゃ……。」

しかし、残念なことに、沙也加が焦っているうち

にパパが部屋に入ってきた。

「沙也加、そろそろ起きなさい。」

そう言われても、おまたに広がっているであろう
世界地図のことを思うと、そう簡単に布団から出ら
れない。

「どうした？早くしなさい。朝ごはんの時間だよ。」

そう言ってパパがベッドに近付いてくる。

「ま、まってパパ！」

「ダメです。せっかくのパンが冷めちゃうでしょ。」

そう言って布団を捲るパパ。ベッドから動けない
沙也加には、それを止める術は当然なかった。

「……おっと。」

あっという間におねしょがバレてしまった。

「体調悪いのか？大丈夫？」

心配するパパに思わず嘘をつきそうになる沙也加だったが、嘘をついてはいけないという日頃の躰によって、沙也加は正直に答えざるを得なかった。

「……昨日、おトイレに行かずに寝ちゃったの。」

うつむきがちに告白する沙也加に、パパはため息をついた。

「寝る前におトイレに行くお約束、守れなかったんだね。」

「.....。」

「久しぶりお仕置が必要なようだね。」

パパは沙也加をひょいっと持ち上げ、ベッドの横に立たせた。

「ちょ、やめてパパ！もう子供じゃない！」

沙也加の言葉を無視し、パパは濡れたパジャマを
おろした。

「きゃっ！」

沙也加のピンク色のシルクのパンツがあらわになる。
パパは沙也加のお尻の下に手を当て、沙也加に
尋ねた。

「言わなきゃいけないこと、あるよね？」

しかし、沙也加は素直ではなかった。今日はたま
たま失敗しただけだ。本当はもうおねしょなんてし
ないのだ。沙也加は何も言わずにただ立つだけだっ
た。

「そうか。」

パァン！

パパは沙也加のお尻を叩いた。

「いっったい！！もうわかったってば！！」

沙也加はお尻を手でかばいながら、沙也加は必死に抵抗した。しかし、パパはベッドに腰かけ、沙也加を膝に乗せた。

パン！

沙也加の手をグイッと掴み背中にまわすと、また1回、沙也加のお尻を叩いた。

「ねえ待ってパパ、お仕置きは嫌！」

「他に言わなきゃいけないこと、あるよね？」

パァン！パァン！パァン！

そういつてパパは沙也加のお尻を今度は3回叩いた。沙也加の心臓が激しく鼓動を打つ。これから厳しいお仕置き——そう、お尻ぺんぺんのお仕置きが始まるのだ。

久しぶりのパパのお膝の上は、昔と変わらず恥ずかしくて仕方がない。お尻が丸出しになった瞬間、冷たい空気が肌に触れる感覚。おねしょで湿った沙也加のお尻は、いつもより冷えている気がした。

パパのおてては温かくて大きいのに、これから始まるお仕置きを思うと怖くてたまらない。

「パパ、待って！ 今日には許して！」

沙也加は必死に懇願したが、パパの表情は厳しい

ままだった。

「お約束を破って、おねしょまでしたんだから、
ちゃんと受け入れなさい。」

そう言って、パパのおててが沙也加のお尻の上に
乗る。沙也加は目をぎゅっとつぶった。次の一発が
来るのを待つ時間が、永遠のように長く感じられた。